Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P—21 挙児希望若年者の複雑型子宮内膜異型増殖症(AH-C),高分化型子宮体癌(E-CA)に対する機能温存療法を目的としたMAP療法の治療効果

東海大学，同病理*
平澤 猛，村野孝代，奥脇伸二，村松俊成，
宮本 壮，村上 優，篠塚孝男，牧野恒久，
伊藤 仁*，安田政実*

【目的】若年者の子宮体癌は，黄体ホルモン療法に感受性が高く，その予後は比較的良好なものが多いと言われている。我々は，妊孕性温存を希望するAH-C，E-CA症例に対し，十分なinformed consentの後に本療法を行い，その治療効果，経時的な病理組織学的形態変化について検討したので報告する。

【方法】本院において子宮温存を強く希望した10例(AH-C=5，E-CA=5)に対しmedroxyprogesterone acetate (MPA)1日600mgを3.5-9ヵ月投与した。治療効果判定は，1回/4週の子宮内膜組織診，細胞診にて行った。また治療前後のestrogen・progesterone receptor(ER・PR)の定量と腫瘍核形態変化の画像解析を行った。MPA療法は10症例に対し，全13コース行った。

【成績】投与後AH-Cでは病変の消失=3例，複雑型増殖症=1例，不変=1例であった。このうち1例は妊娠成立したが，流産となった。E-CAでは，病変の消失は4例に見られたが，うち1例は，治療終了後の不妊治療中にE-CAの再燃が見られた。他の1例は妊娠・分娩となった。全症例を通し，加療中に病変の進行した症例は認めなかった。ER・PRは投与前高値を示したものは投与後は陰性となった。腫瘍核形態計測ではほとんどの症例で核面積の減少，irregularityの消失，核の円形化を認めた。

【結論】MPA療法は若年者のAH-C，E-CAにおいて有効な治療法であると考えられた。病巣の消失が見られなかった症例でも加療中の病変の進行は認められなかった。

P—22 当院における、若年子宮体癌の臨床検討。

鹿児島市立病院
中村俊昭、大西義孝、前田隆嗣、平野隆博
松田和洋、波多江正紀

（目的）近年、子宮体癌は増加傾向にあり、その中でも若年者の子宮体癌は増加傾向にあると言われている。子宮体癌の治療は子宮摘出が基本であるが、若年者は妊孕性温存の為に、ホルモン療法を施行される場合がある。そこで当院における、若年子宮体癌の臨床背景と予後を検討した。

（方法）対象は1983年から1997年までの子宮体癌患者233例を83年から87年を前期、88年から92年を中期、93年から97年を後期と5年間隔に分け、35歳以下の若年子宮体癌患者の進行期、治療法、患者背景、予後、ホルモン療法後の妊娠の有無の検討を行った。

（結果）子宮体癌患総数は前期61例、中期81例、後期91例と増加傾向にあり、40歳未満の子宮体癌患者数は前期2例(3.3%)、中期9例(11.1%)、後期8例(8.8%)の19例であった。特に35歳以下の若年子宮体癌患者は12例（前期1例、中期6例、後期5例）で、平均年齢は中期33.0±1.8才、後期27.8±3.6才と年齢の低齢化傾向を認めた。BMI［body mass index=体重(kg)／〔身長(m)〕^{2}］が25以上の肥満は12例中5例、PCO症候群も5例に認めた。12例中子宮摘出が行われたのは7例（前期1例、中期5例、後期1例）であった。残り5例（中期1例、後期4例）はホルモン療法を施行しており、4例に癌消失を認め、1例は治療継続中である。癌消失例の1例に3人の健児を、1例は妊娠継続中である。また中期の子宮摘出症例の1例に死亡を認めた。

（結論）子宮体癌患者の年齢の低齢化傾向を認めた。一定条件を満たした子宮体癌症例に限って、ホルモン療法による妊孕性温存は可能であると判断された。

NII-Electronic Library Service